第二節　縄文時代

一　縄文時代とはどんな時代（概説）

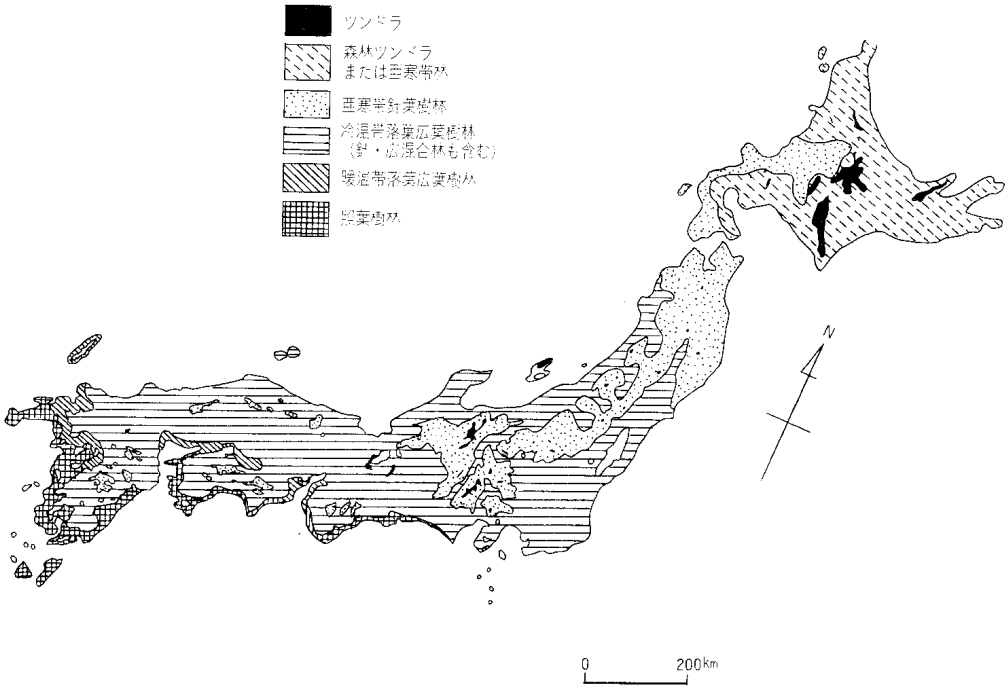
土器の発明

土器が発明され、土器が生活のなかで使用されるようになった時代を縄文時代とよんでいる。この時代の代表的な土器の表面に縄目の文様が付けられていることから、この時代の名が付けられている。

最初の土器は旧石器時代の細石器といっしょに出土することから、この時代の始まりをめぐって異なった意見が出されているが、いちおう今から約一万二〇〇〇年前から二千数百年前の約一万年の間を縄文時代としている。最古の土器は泉福寺洞穴（長崎県佐世保市）から出土した土器（豆粒文土器）で、年代測定の結果は約一万三〇〇〇年前を示している。

それに続く土器として福井洞穴（長崎県北松浦郡）出土の土器（隆起線文土器）があり、これらは世界最古の土器群として位置づけられている。なぜこのころ土器が発明されたかについて、安田喜憲氏は気候と動植物の生態系の変化からこれをとらえて「晩氷期の気温の温暖化にともなう落葉広葉樹林の拡大と大型哺乳動物の減少の中で、必然的に植物性食料の重要性が増した。木の実を集めてそれを加工し貯蔵するための容器としての土器を作り始めたとみることはできないだろうか」として

第8図　晩氷期の日本列島の植生図と古地理



（安田喜憲『環境考古学事始』 1985より）

「日本の土器文化は、コナラ・クリ・ブナ・トチノキ・シデ・ニレなどの落葉広葉樹林の中に誕生の起源を求めることができる」と述べている。（第8・14図参照）

土器の移り変わり

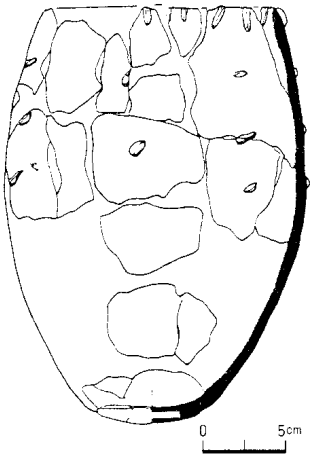
土器の製作は、約一万年にわたる縄文時代（草創期・早期・前期・中期・後期・晩期に分けられる）の中で、日本列島の各地域においてそれぞれに独自の発達と交流をかさねながらまた新しい形を生み出していくという推移を見せている。

最古の土器を生み出した九州はその後は東方（中部・近畿・瀬戸内など）からの文化的影響のほうが強く、縄文式土器の発展過程ではむしろ受け身の立場に置かれることの多かったことがわかってきた。（第9・10図参照）

生業と道具

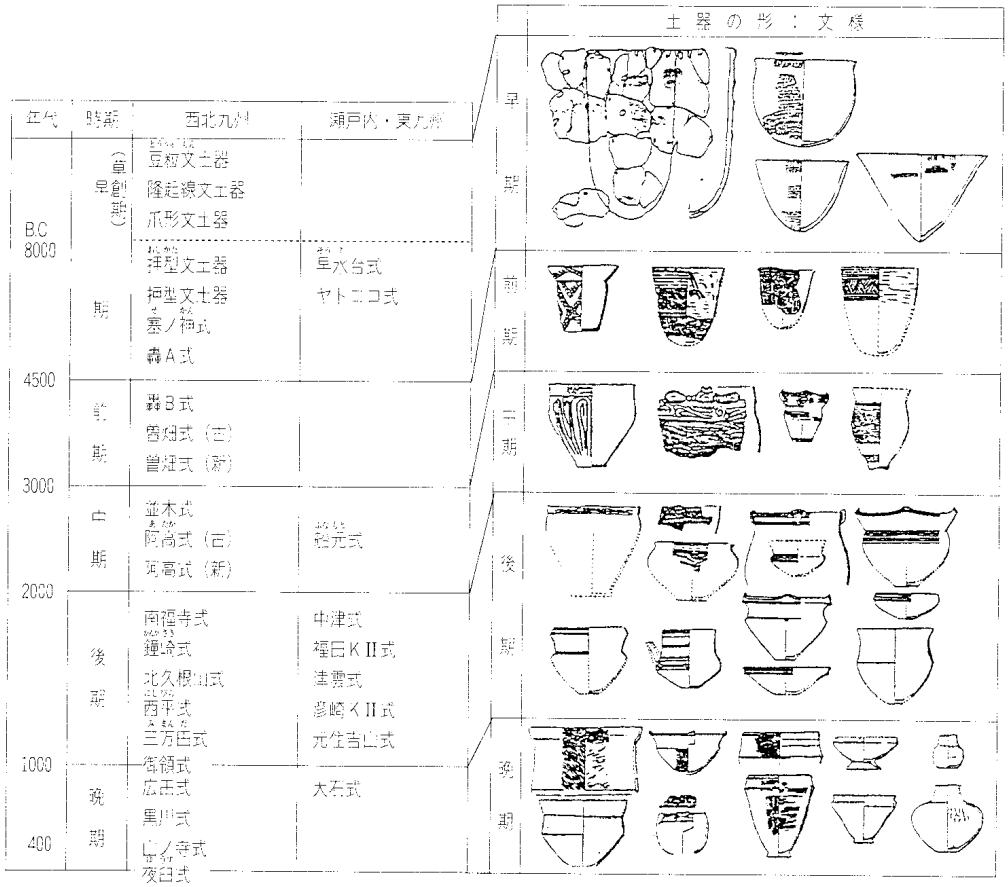
縄文時代の食料の獲得は狩猟・漁撈（ぎょろう）と植物採集の三つがあわせて行われていたことを、貝塚や貯蔵穴・住居跡などの発掘の結果は物

第9図　豆粒文土器



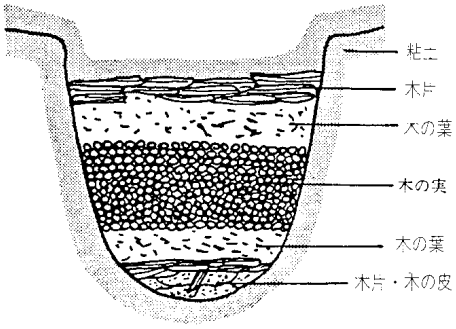
（長崎県泉福寺洞穴出土）

第10図　（九州地方）縄文土器の編年と土器の移り変わり



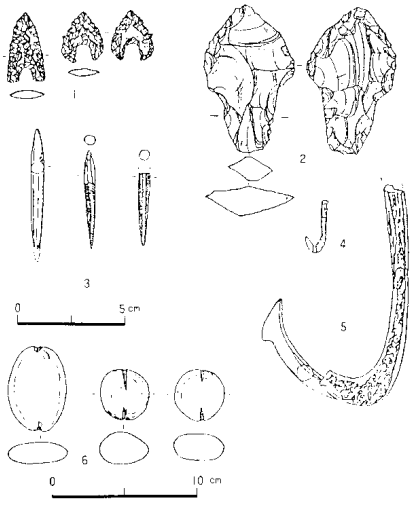
B.Cは紀元前（『福岡県の歴史』光文館　1990より）（『福岡県百科事典』㈳西日本新聞社　1982より）

第12図　木の実の貯蔵穴模式図
（坂ノ下遺跡：西有田町、中期）



（『図説発掘が語る日本史6』新人物往来社 1986より）

第11図　狩猟・漁撈具



1　打製石鏃　2　石銛　3　骨製ヤス
4　単式釣針　5　結合釣針　6　切目石錘
（『福岡県の歴史』光文館　1990より）

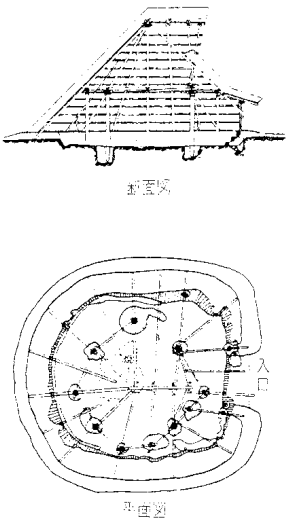
語っている。またそれらの知識や技術は少なくとも早期末にはすべての要素が整ったと考えられている。

狩猟ではイノシシ・シカなどの骨の出土が最も多く、そのほかタヌキ・ウサギ・ムササビ・カエル・鳥類など約七〇種類近くの動物が対象になっているといわれる。

狩猟具は短弓の出土に見られるように、弓矢が発達したらしく、石鏃（石の矢じり）の出土が多くなり、石槍は少なくなっていく。そのことについて安田喜憲氏は「落葉広葉樹林の森では…木の葉に隠れたイノシシやシカをとらえるには敏速にことをすまさなければならない。ましてや梢でさえずる鳥をつかまえるには、もう投げ槍には頼っておれなかった。これにかわる早くてねらいの確かな矢はどうしても必要であった」と述べている。なお、動物の皮剝（かわはぎ）などの処理にはスクレイパーが使用されている。（第15図の2参照）

漁撈は河川や海洋においての貝類や魚類の捕採であるが、貝塚などの発掘により貝種や魚種が明らかにされる。貝類は北部九州の貝塚を見ると、ヤマトシジミ・オキシジミ・マシジミ・マガキ・ハマグリ・アカガイ・サルボウ・ヘナタリなど淡水・汽水・海水産のものが見られる。特に前期（約六五〇〇～五〇〇〇年前）に気温の温暖化により海進が進むと、遠浅の海岸や入り江の発達により、内陸部にまで貝塚が形成されている。魚類ではマダイ・クロダイ・フグ・スズキ・メバル・コチ・サメ類・エイ・フナなど多くの魚種が見られる。漁具としては刺突具である

第13図　竪穴住居の構造



石銛・骨銛・ヤス、釣り具として釣り針、そのほか漁網の石錘などがあり、各種の漁法が発達していたことがわかる。

このように動物や魚貝類が食用されたが、しかしこの時代を通しての主食は植物質の食料とみられている。数多くの遺跡から出土している植物遺物は、クルミ・トチ・ドングリ・クリなど堅果類の種子が圧倒的に多く、重要な食料源であった。特に西日本に広く分布する照葉樹林のドングリは渋味が強いために水晒しの処理が必要で、石皿・すり石・敲石などは破砕や粉末にするための道具と考えられる。そのほかにはイモ・ワラビなど根菜類の食用も考えられ、扁平打製石斧はそれらの掘り起こし用具とされる。

また土器を使った煮炊きは、加熱処理の新たな調理法を加えることになり、食用にできるものの種類を多くしていったはずである。（第11・12図参照）

第14図　土器の製作

縄文土器の作り方　1. 粘土紐を適当な太さにする
2. 底を平盤状にたたいて作る
3. 粘土の紐を積み上げる
4. 内・外を整形する
5. やや乾燥させ、縄目をつける
6. 乾燥させ、強火で焼く

村の生活と信仰

縄文時代の住居は一般的には竪穴住居が知られているが、平地式住居や掘立式の建物もあったことがわかっている。竪穴住居は縄文時代早期から現れるが、円形または方形に土地を掘りくぼめ、柱を立てて草などで屋根を覆う構造であり、一般には中心に炉が設けられている。発掘によって住居跡からは土器類・石皿・石斧・スクレイパー・石鏃などあらゆる生活道具が出土しているのでそれぞれの住居ではほぼ独立した生活が営まれていたと考えられている。

このような竪穴住居に住む人数については幾つかの見解があるが、例えば小山修三氏は「一～八人までの比較的小規模な人数で…結婚した男女とその子、兄弟・姉妹の一部を含む〝縄文的核家族〟が多かったと考えられる」と述べているが、鈴木公雄氏は「老若合わせて四～五人程度」と述べ、さらに「住居の広さは平均して二〇㎡（六畳二間）前後がもっとも多い」としている。このような竪穴住居が集まって村が形成されることになるが、先の鈴木氏は「四～五軒の住居からなる三〇人たらずの規模と考えるのがもっとも妥当のよう」としている。（第13図参照）

次に縄文時代の人々の精神生活については、やはり遺跡・遺物の中から探られているが、既に霊魂に対する畏怖心・再生観念、人生の通過儀礼、狩猟儀礼などもあったと考えられている。

死後に手足を折り曲げて屈葬されたり、遺体の一部が除かれていたり、遺体の上に石を置く「抱石葬」などの例は、死霊に対する畏怖を表すものとされている。また土で作った人形である土偶はほとんど女性像であり、しかも小破片が多いことについて水野正好氏は「母なる土偶は生命を生む力を持ったまま壊され、その母としての力を各所に配布し、それぞれの地のよみがえりを迎え、新しい力を獲得しようとした」と述べている。

次に幼児の死後、遺体を底の打ち欠いた甕に入れ、竪穴住居の入り口

に埋納（埋甕）する風習がある。これは、それを女性がまたぐことにより、子供の魂を胎内に転入させ、新しい生命のはぐくみを祈る妊娠呪術とする意見がある。

また東北の一部で発生した抜歯の風習は成人式の通過儀礼と考える意見もあり、縄文後期には九州でも行われるようになっている。

狩猟儀礼については、成人男性の墓坑に限って石鏃・槍先の出土が見られることやイルカやトドの頭骨の取り扱い方などの例から、狩猟についても何らかの意味づけと儀礼があったのではないかという考えも出されている。

二　京都・行橋地方の縄文時代

京都・行橋地方で現在まで確認されている縄文遺跡は一八遺跡であるが、ほかに土器や石器が地上で採集された個所を含めると二〇か所は超えるものと思われる。その中で発掘調査が行われたのは、浄土院遺跡（苅田町）、節丸西遺跡・川ノ上遺跡（以上豊津町）、タカデ遺跡・寺門遺跡・自在丸遺跡・五反田遺跡・清四郎遺跡（以上犀川町）であるが、浄土院遺跡・節丸遺跡を除けば若干の土器片や石器類の出土を見るのみで、遺跡の全体像はつかめていない。（第21図参照）

この地方の縄文時代の遺跡分布を見ると、遺物の散布地を含めて砂丘上・河岸段丘上・丘陵上、台地先端部・低地となっているが、概して水はけのよい場所に位置している。さらに遺跡全体について言えることは河川や海に近く、行動領域の範囲内に豊かな山地が控えていることである。

全時期を通じて狩猟と採集が中心の生活であってみれば、一方では淡水・汽水・海水産の魚貝類、他方ではイノシシやシカなどの獣類・鳥類・木の実などの得やすい場所に住居が営まれ、集落が形成されたものであろう。

節丸西遺跡（後期）からは打製石鏃・石匙・スクレイパー・石錘・敲石・石皿・台石など狩猟・漁撈・解体処理・調理用具（木の実などの）が揃って出土している。（第15図参照）

その中で特異なのは小豆田遺跡・天生田遺跡（行橋市）などの川底遺跡であるが、もともと集落近くに流水があり、ある時期になって洪水などで流路が変わり埋没したものと考えられる。同じことは黒田遺跡（勝山町）についても言え、住居跡内に多くの流木が見られたという。

次に遺跡を時期的に見ると、ごく最近までは中期以降、特に後・晩期の遺跡の出土が多かった。しかし、この地方での広範な圃場整備が進められそれに伴う発掘調査の多くなる中で、寺門遺跡・自在丸遺跡（犀川町）からはまだ出土例の少ない縄文早期の押型文土器片が出土しており、この地方でもこの時代の早い時期から人々が各地域に住み始め集落の形成を始めていたことがわかりつつある。今後は各地域でもさらに古い時期の遺跡の発見が見込まれる。

前出の浄土院遺跡・黒田遺跡・節丸西遺跡からは扁平打製石斧が出土しているが、この石器については棒の先に装着されて掘り起こし具としての役割も想定され、縄文農耕を考えさせる石器と考えられているが、これら三遺跡はともに縄文後・晩期の遺跡であり、このころからの農耕栽培の始まりを印象づける。（第15・17図参照）

住居については、節丸西遺跡のみで二四軒の住居跡が発掘されている